

Eureka XII

六年制通信 No.5 令和6年5月1日(水)号

「舟を編む」雑感

終わってしまいました。2月18日(日)から毎週日曜日のお楽しみ。全10回。今まで観てきたドラマがどれだけあるのか自分でもわかりませんが、ひょっとしたら一番かも。それくらい脚本も役者さんたちもよかったなあ。ま、でも、これも、いつも君たちに言っているように自分と全く同じ感性を持つ人間はいないわけですから、私と全く同じ感想を持つ人もいないでしょう。でも、そう思うと余計にこのドラマが好きになってしまいます。「舟を編む」は言葉の世界が舞台なのですから、脚本でも正しい日本語に気を使っていたに違いない、そう思わせるシーンが何話か忘れましたがありました。君たちは知らないでしょうが、何代か前の総理大臣が「未曾有」を「ミゾーユー」と発音して失笑を買ったことがありました。「未曾有」は「これまでにそれに類する事件が一度もなかったこと」で「未曾有の困難」などのように使います。

「ミゾーユー」と発音した総理を揶揄しながらワイドショーなどで「有」は「ユー」ではなく「ウ」と読むので「ミゾーウ」でなければいけない、全く一国の総理ともあろう人が漢字も知らないとは情けない、という論調でしたが実はこれも間違いです。「未曾有」はルビを振るなら「みぞう」で、しかも発音は「ミゾオ」です。これがドラマでは馬締光也主任が正しく発音していました。さすがっ。

マスコミの影響からか、今でも「ミゾーウ」と思っている人がいるでしょうが、思い込みというのは誰にでもありますね。私ももちろんあります。ちょっと質問してみましょう。立ったり座ったりする身のこなしのことを「立ち居振る舞い」と「立ち振る舞い」、君はどちらを使いますか、どちらが正しいと思いますか。「居」があるかないかだけですが、私はずっと「立ち居振る舞い(たちいふるまい)」と言ったり書いたりしてきました。「立ち居」と「振る舞い」が合わさった語だということを疑ったことはなかったですから。「立ち居」は「起居」と書くこともできますしね。ところが最近「立ち居振る舞い」の用例よりも「立ち振る舞い」の方が古いということを知りました。「立ち振る舞い」の初出は世阿弥の『風姿花伝』ですから1400年くらいです。「立ち居振る舞い」は1477年の臨済宗の僧の書いた『史記抄』なのだそうです。明治以降の文学作品では圧倒的に「立ち居振る舞い」が多いのですが、「立ち振る舞い」は間違いとさえ思っていただけに驚きました。両方ありなのですね。

言葉は不思議ですね。ドラマのセリフではありませんが、言葉は生まれ、中には使われなくなったり、違う意味を付与されたりしながら、変わっていく。主人公は自分が無意識に使っていた言葉が人を傷つけていたことを辞書に教えてもらいながら、正

確かに言葉を使うには、言葉の大海を迷わずに渡っていくには、安心して乗れる舟があるのだという辞書編集部の人たちに共感し、自分も変わっていく。辞書作りに魅せられていく主人公は「生きるとは変わる」と、自分の変化を通して実感していきます。若者言葉に老人は首を傾げ、その老人が若い時は当時の老人たちに眉を顰められていたに違いないでしょうね。君たちもやがて、「最近の若いモンは何しゃべっているのかわからん」と嘆くんだらうなあ。嬉しっ。

私たちは言葉には霊力のような力があると思っている民族だと思います。言霊あるいは言魂の出典は『万葉集』巻十三 3254 の「しきしまの日本（やまと）の國は言霊のさきはう國ぞまさきくありこそ」という柿本人麻呂の歌ですね。言霊信仰は学問的な意味は知らないのですが、言葉を発するとそれが実現してしまうと、言葉にはそんな力があると、ま、市井の人々はそう思っています。私もそう思うことがあります。ゴルゴ松本という芸人さんが言っていました、口からプラスのこととマイナスのことを言う「吐」という字になる。しかし「吐」からマイナスのことを言わなくなると「叶う」になる、と。こういうことができるのも日本語のいいところですね。言霊を信じるのならマイナスのことは言わないでおきましょう。そのマイナスの言葉は自分が一番に聞くのですから最も影響を受けるのは自分自身のはずですから。

今週のおすすめ

・赤染晶子 『乙女の密告』 （新潮文庫）

舞台は京都の外国語大学。赤染さんの母校である京都外国語大学でしょうな、きっと。芥川賞受賞作。100 ページ足らずの、ほとんど短編ですね。出てくるものはドイツ語の暗唱にいそむ女子大生たち、課題書である『アンネの日記』、人形を愛するドイツ人の変人教授（私にはただの薄気味悪い変態教授に思えましたが）、くらいです。教授は女子学生のことを「乙女」と呼びます。連呼します。小説の全編を通して「乙女」だらけです。解説にもありますが、「乙女達は常に辞書を引いている」、「乙女とは自分とは違う異質な存在をきっちり認識する生き物なのだ」、「乙女とは純潔な生き物である」とのこと。よくわかりません、昭和の男の私には。

アンネは密告によって逮捕され、病死します。密告者の名前はわかっていません。賞金が密告者に支払われたことは記録に残っています。アンネはオランダ人になりたいと書いています。しかしユダヤ人であることに誇りも持っています。ちなみに『アンネの日記』はオランダ語で書かれています。原題は「Het Achterhuis ヘット・アハターハウス（後ろの家）」です。

大学で乙女らしからぬ振る舞いをした者がいるとの噂が広まって、密告者は誰かというのが一つの焦点となるのですが、何度も出てくる『アンネの日記』の暗唱がうまくいかないシーンとアンネを密告したのが誰かという問題をそれと重ね合わせるには無理があると思いましたね。ちょっと深刻さが違いすぎて。あと、外国語大学には男子学生もいるのですが全く登場していません。不思議。

BGM は Del Shannon の *Runaway* でした…。